

2024年9月22日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教11「新しく生まれるために」

エゼキエル11：19～21、ヨハネ3：1～6

「さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった」（1節）ここにニコデモという人が登場してまいります。彼はファリサイ派に属し、しかもユダヤ議会の議員でありました。それはユダヤ社会の中ではかなり高い地位にあることを意味します。また4節には「年をとった者が、どうして生まれることができますよう」ありますから、老人であったとも考えられます。このまま何事もなく人生を終えていけば十分という人です。その彼がイエスさまのところを訪ねました。「ある夜、イエスのもとに来て言った」（2節）多くの学者、説教者がこの「夜」に注目します。夜の訪問は、ニコデモがユダヤ議会の議員である立場から人目を避けていたのかもしれませんが。それでも勇気を出してイエスさまのところに来た。いや来ざるを得ない深い理由があったのではないのでしょうか。ニコデモの苦悩と勇気の入り混じった複雑な感情を読み取ることができます。

「夜」は闇です。ヨハネ福音書は初めからこの「闇」を問題にしていました。「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」（1：5）光であるイエスさまが来られた。けれども世はイエスさまを理解しないし受け入れない。夜の闇は、何よりもそのような人間の罪の状態を表しています。そしてその罪の闇の先に何があるのでしょうか。「罪が支払う報酬は死です」（ローマ6：23）とパウロは言います。なぜニコデモはイエスさまのところに来たのか。彼は年をとっています。残りの人生を考えるのです。死をいやでも意識せずにおれなくなる。彼は死の闇が人生に確実に忍び寄ることに恐怖を感じていたのではないのでしょうか。

3章21節に注目してください。「しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために」この世は罪の闇、死の闇に支配されている。けれども真理を行う者は光の方に来る。ニコデモも真理、光を求めて、神さまに導かれてイエスさまのところに来ました。この「来る」（エルコマイ）は、ニコデモが「ある夜、イエスのもとに来て言った」（2節）の「来た」と同じ言葉です。この「来た」という言葉は、むしろヨハネ福音書では、わたしたちがイエスさまのところに来たというより、イエスさまが父なる神さまのところから来たという意味で使われます。「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」（1：9）とあります。何より今日のところでニコデモ自身が「あなたが神のもとから来られた教師である」（3：2）と言っています。同じ言葉です。イエスさまは神さまのもとから来られた。わたしたちはイエスさまを受け入れない。それでもイエスさまはわたしたちのところに来られる。イエスさまが来ることの方が勝るのです。イエスさまの到来に飲み込まれるようにして、わたしたちはイエスさまのところに来てしまうのです。

わたしたちが教会に来ることも、その根拠はわたしたちにあるものではありません。そこにはわたしたちの勇気も少しはあるかもしれませんが、それ以上に、わたしたちのちっぽけな勇気など吹き飛んでしまうほどに、それに勝ってイエスさまがわたしたちのところに来てくださった。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（1：14）のです。そのイエスさまに捕らえられて、わたしたちは教会に導かれています。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」（15：16）ここには神さまの側の一方的なご支配が働いています。ニコデモもその神さまのご支配に困惑しながらも導かれている者の一人です。

この神さまのご支配のことを「神の国」と聖書では言いますが、今日与えられたところでは、その神の国について、イエスさまは直接ニコデモに教えられます。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」（3節）ここで「新たに」と訳された言葉アノーセンは、「上から」とも訳することができる言葉です。「人は、上から生まれなければ、神の国を見ることはできない」というのです。「上から生まれる」とはどういうことでしょうか。それは神さまによってということ。下から、人間の側から新しくなることはできない。人間がこの罪の闇から救われるのは、人間の力ではない。下からではなく上から、神さまからなのです。それは上からの恵みによってと理解してもよいでしょう。救いは常に上から働くのです。

ニコデモは、ファリサイ派に属していました。特に律法に厳格なグループです。いかに神さまの教えに忠実に生きるか。それを真面目に、愚直に追い求めて来た。そういう人生だった。でもどんなに努力しても、登りつめても、人生の不安は消えません。死の闇は消えません。イエスさまの教えを聞いても、「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか」（4節）と言います。ニコデモは、この世の常識の中で、価値観の中でこれまで生きてきました。だからイエスさまの教えを奇異に感じてしまう。でもそれが紛れもないわたしたちの現実です。神さまの救いも下からしか考えられない。この世の事柄の中に押し込めてしまう。この世の成功や富で救いをはかろうとする。けれども人生の問題は、それでは解決できないのです。富が死の不安からわたしたちを救ってくれるのでしょうか。この世の地位や名誉が罪から救うのでしょうか。

イエスさまは言われます。「はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」（5節）これは洗礼を意味しています。水は洗い清めます。ノアの物語のようにこの世の罪を一掃する。それが水です。イエスさまは宮きよめをなさいました。神殿で物を売っている人々を追い払われた。そのように水で洗いきよめられる。でもそれで終わりではありません。聖霊の働き、それは創造です。命の息を吹き入れられて人間が造られたように、新しく造り変える。聖霊は、人間が新しく生まれることを可能にします。

わたしたちは、洗礼を受けてイエスさまに結ばれ、十字架とよみがえりの御業にあずかり、罪に死に、神さまと共に生きる永遠の命に生まれます。そこに人生の問題の最大の解決があります。いくつになっても、年をとっても、わたしたちはそのように新しく生まれることができます。決して遅くはありません。わたしたちは、教会でそういう人たちを何人も見て来ました。教会は、上から、神さまの恵みによって、神の国に迎えられた人々の集まりです。イエスさまはそのために、わたしたちのところに来てくださいました。わたしたちがイエスさまのところに来る前に。

天の父よ。わたしたちがイエスさまのところに来るよりも、イエスさまの方がわたしたちのところに来てくださいます。そしてわたしたちを神の国に導いてくださいます。そのために十字架とよみがえりの御業を行われました。その救いに目を開かせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。